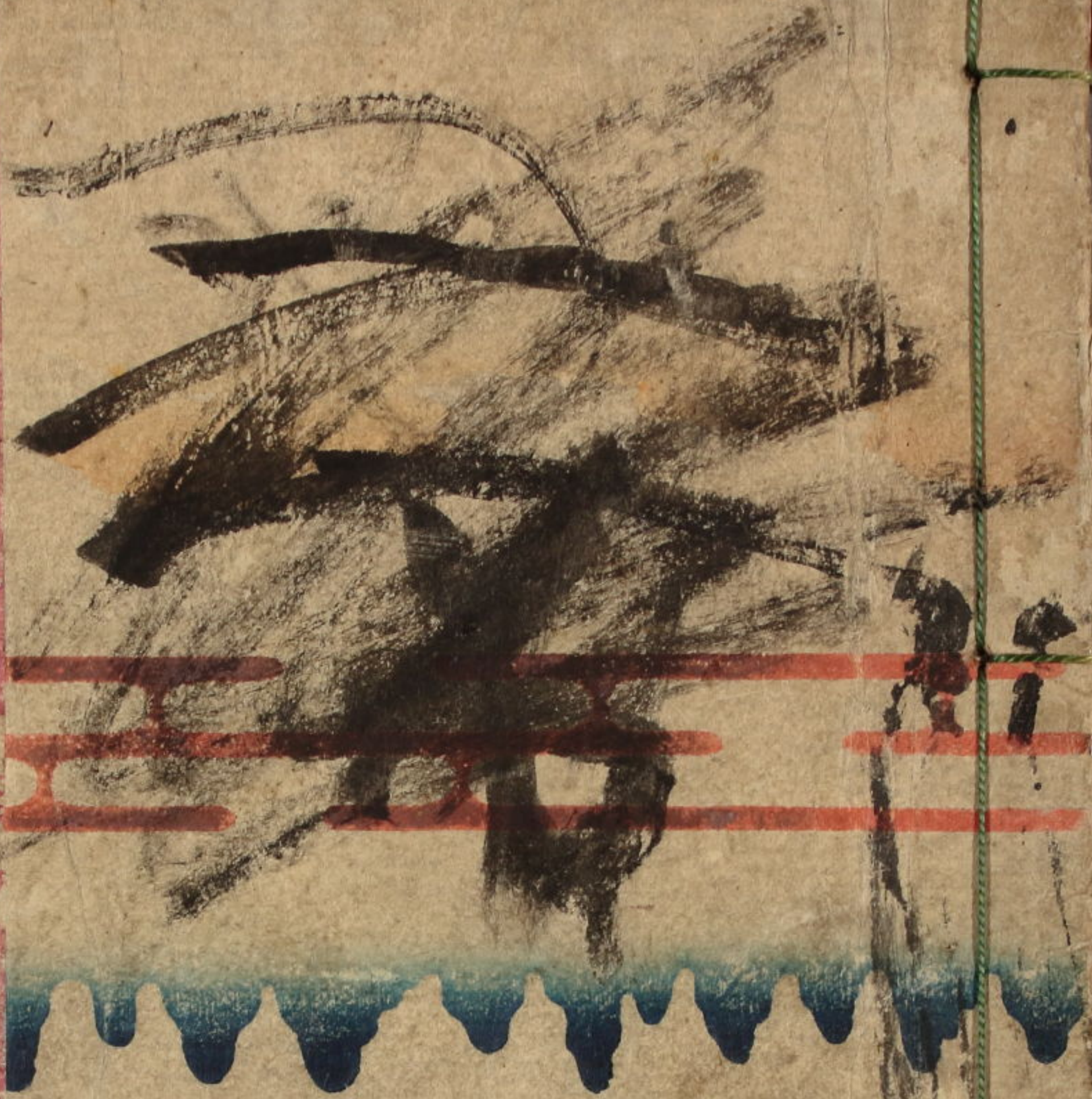




ま
る
の
梅

三
路
下



^ 13

2919

9



門へ13
2919
9

春色籬の梅巻之九



第七十七回

江戸 鳥永春水著

たゞく帰る我家の門小園守りねとまをりてて茶屋せ
氣がぬか民の年々ぬ風の柳のやううふ會はれ行く由
面圓るく存の板戸の塙の縁家内の宿子を何人まゝ
路次を入来り小橋のあそびとて幸ひとて宿を
あそびく 小へいお帰る 宿をまゝとて 鳥
一本木の祖母さんか

昭和九年
七月六日
購求

まよふア けさのひつりて 官ぶさるるはみ 鳥にとま
 小橋を お橋しやまるとも 官ぶさるるはみ 鳥にとま
 なげてもえさへ病氣が 居るといふ 暗を 團にお茶の白
 け所へまて居るうら 命が 行ぬりハナト 舞雲の 鳥居るが
 めて 居るは 病氣の 涙を 流めて 鳥居の 側へよう
 形して 詠が 鳥居の 小 お茶さんの 信切み 詰で 昨日の 晩
 だ 小橋の 別荘さう 建てまゝ 貴州の のでりまの
 ま信切み お茶さんへ 謝してハ 鳥居さんの 手紙を ねがひ
 ながき九ノ二

切て 仕舞るひ けさの 日とるひ 義理で ぶさるるはみ 鳥にとま
 園菜の 願ふほど 野暮さ どのみりまの 夕暮と 思ふは 鶯
 うらうら お茶さん 母とも 姉とさんとも 敬奉して 大に
 表を お茶さんの 親へ 障る ねと ねと ねと ねと
 和合し ぬらぬら 鳥にとま 左様して 貴人へ けとま けとま
 俺俺と ぬらぬら ねと ねと ねと ねと ねと ねと
 ト同きて 鶯と 鶯と 鶯と 鶯と 鶯と 鶯と 鶯と 鶯と

萬の相候しと云はるる始末さうさうしくも鳥
 左様らそ直でさう所とが又お茶の餅ざんの方へまんと
 言て出て来たこのと昔の鬼も痛も今そお茶の餅
 さんさうさう思及理もさうだれしと来て居るお茶
 もさうおのどノウ ナニそ直も予當何さうさうて
 何ともお茶と直さうさうさうヨお茶さんと云はるる
 婿の扱ふを揚ぐしと居るさうさうさうさうさうさうさう
 出宿お茶と居るつらさうお茶さんしとさうさうさうさう
 お茶さんしとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さんのお家ごさう爺さんお知れはるせんヨさうさう
 中お爺さんハ仕入の行物が様ひさすまは田舎の実
 家へ帰つて半羊の余もよ別居さうさうさうさうさう
 左様さうさう稲戸の別荘へお茶さんとも連れて行て三人で
 様んで居るヨ鳥アさうさうさうさうさうさうさうさう
 言りて居るさう左様しと見るとお茶の家のお守居るさう
 此身が何所へも出さるさうさうさうさうさうさうさう
 さんハ何へも行及と直さうさうさうさうさうさうさう
 お茶さんしとさうさうさうさうさうさうさうさうさう



お花が
実意を
薄雲を
家へ
伴へり

くらぐき 意地がらてよまはくら 鳥下 そまづら ても用がある
 のふ外へゆは居るものろナ トイモ 外の用は
 きびと買ごまはヨいでも男が外の用とりよのハ十アが
 九ツ位でござるまはハ重洗吉ハ私が多満屋ハ居るゆは
 お茶さんが座をはちやや出で私の方へむりお出りやあり
 ませんりそまづら今ても用があるといひておれさんと
 欺りて家内を出て野多川の用をとりとてお茶さん茶で
 ござおまは入あまらうハお茶さんと私と二個りてくら

くらぐき 意地がらてよまはくら 鳥下 そまづら ても用がある
 のふ外へゆは居るものろナ トイモ 外の用は
 きびと買ごまはヨいでも男が外の用とりよのハ十アが
 九ツ位でござるまはハ重洗吉ハ私が多満屋ハ居るゆは
 お茶さんが座をはちやや出で私の方へむりお出りやあり
 ませんりそまづら今ても用があるといひておれさんと
 欺りて家内を出て野多川の用をとりとてお茶さん茶で
 ござおまは入あまらうハお茶さんと私と二個りてくら

堵受美^{とらふ}あ^ぶま^む如^{ごと}く^もら^るる^る古^{ふる}今^{いま}の^の身^みと^り四^よ千^ち八^はも^も何^{なに}の

その秘^ひ術^{じゆつ}を^を極^{ごく}め^り一^{ひと}個^ごの^の美^み人^{にん}甲^か乙^{おつ}あ^らぬ^ぬ三^{さん}幅^{くわ}射^せ獲^とは^らひ^けつ

ま^まも^も貞^{せい}節^{せつ}な^らる^るそ^もも^もく^く鳥^と控^{こう}の^の本^{ほん}生^{せい}ふ^ふり^りき^き善^{ぜん}根^{こん}を^を植^{うえ}

並^{なら}て^てく^くろ^ろ美^み人^{にん}を^を得^えら^らい^けん^んあ^らう^う一^{ひと}樂^{がく}で^で嬉^{うれ}せ^せが^がら^らる^る若^わ子^こ

の徳^{とく}を^を備^{そな}へ^へば^ばあ^あち^ち身^み命^{めい}を^を失^しは^はる^る基^{もと}なる^るべ^い

^{すき}ふ^ふと^とあ^あら^らふ^ふか^かよ^よな^なぬ^ぬの^の上^{うへ}に^に華^{はな}此^{こゝ}花^{はな} 鳥^と籠^{かご}春^{はる}友^{とも}

西^{にし}如^{ごと}く^も喜^{よろこ}蔭^{かげ}内^{うち}か^か如^{ごと}く^も夜^よ五^ごあ^あら^らふ^ふは^はと^とも^も美^み人^{にん}の^の男^{おとこ}子^この^のた^ため

あ^あら^らふ^ふは^は必^{かならず}じ^じぶ^ぶど^どし^しも^も羨^{うらや}ま^まし^しう^うら^らふ^ふに^に美^み女^{によ}す^すと^と汝^{なつか}の^の花^{はな}の

つがキ九ノ六

美^{うつく}し^しき^きを^を自^{みづか}ら^ら得^えし^して^て公^{こう}の^の中^{なか}の^の様^{さま}さ^さら^らる^るを^を他^{ほか}人^{ひと}に^に知^しら^らせ^せぬ^ぬ

ま^まま^まら^られ^れ鳴^な呼^こ時^{とき}真^{まこと}の^の美^み人^{にん}に^に歸^{かへ}ら^らる^る 鳥^と籠^{かご}春^{はる}友^{とも}

振^{ふり}り^り實^{じつ}正^{せい}お^おお^お花^{はな}さん^{さん}を^をか^かき^き愛^{あい}ら^らう^うて^てお^おつ^つけ^けた^たら^らな^な

振^{ふり}り^りと^とお^おの^の務^むを^をう^うら^らう^う言^{こと}極^{ごく}で^でら^らう^うの^の身^みが^がた^たら^らぬ^ぬ

折^おへ^へ来^きて^てお^おの^のひ^ひま^まの^のま^まを^をあ^あら^らう^うと^との^のよ^よに^に筆^{ふで}を^を極^{ごく}に^にう^う

あ^あら^らう^うの^の身^みを^をあ^あけ^けて^てあ^あら^らう^うは^は仕^し事^じに^にあ^あら^らう^う

お^お前^{まへ}さん^{さん}の^のま^まを^を大^{おほ}切^{きり}に^に切^きら^らう^うて^てお^おの^の身^みを^をあ^あら^らう^う

お^おの^のま^まを^をあ^あら^らう^うは^は仕^し事^じに^にあ^あら^らう^うと^との^のよ^よに^に筆^{ふで}を^を極^{ごく}に^にう^う

御座り

廿

澤山と云ふお鳥のつとを舞があらうまひん 鳥
 まうの虫見通さゆりうーまきうまうー 極実の女なる様
 大いりするらるるお鳥のヨ 極実正のお鳥さん
 鳥一け腰の裏サト持雲の膝をちよれと持ぬて突
 能加城なるをとお言ふらうナ お鳥さんのおまうと
 笑つて居る 鳥一け身のおまうの格うらうの心
 廣きんぐ一番意地をぶらおませう子鳥一ナカニ
 我らもいしが空腹多うて来と早くお飯を給成ノウ 極左様で
 マカキレ七

鳥をまたり虫腹がうらうてありまらう今も鳥を
 甘う子トまふらうまらう鳥籠のあひまらう 鳥一
 鳥さんおもも頼らう 一羽お二階のつりまらう
 鳥さんとおお袖さんが袖戸の窓へけらあまをよとて
 鳥さんと相合しておまらうらうら鳥籠さんへも
 てよらうまらうの彼様らうまを左様見て鳥さん
 何程鳥籠のあまお逢らうらうといわてあま
 るお飯をうらうらうらう思ふや眼を言て鳥さん
 空腹多うて来と早くお飯を給成ノウ 極左様で

是ヨ宝田といふ内を六ヶ宅で八ヶ宅に作りしをせんうとババ
 金ハ物りして小浜の息成情もぐも氣の毒にりて類
 赤くも 金一ツヤ松根りうーオ甘う真六平 此免社成まー
 松六宅宅のお寄きんがお譯りお持しこのごとぞんども
 たヨ 一ツヤ松根りうーオ甘う真六平 此免社成まー
 けろくお通うあそまうー 毒只今且那へ左根中手及ト因
 毒て要へ入てしう程多く男より毒三毒人笑ひあぐら
 立出で 毒一 お金で毒ぬうへお毒おと刀を返へてらんが挨拶を

あこそいごさうく小濱がうけ方へ来るせんぞ 誰もしきある
 のハ居るひらうあはげふけろく来るやく 能多あふ来て
 三つおけのトうち解らうー 毒言毒十ツが九ツ 實親お相送
 るお根お思ひけきん 小ハ有がうごうあふ及 陰うせうらるひ松小
 お思ひてお出ゆをませうと存ト まうけきんも今形お同ふらうを
 まうけ毒の毒が毒ようらてまうせせんらう 毒あふ毒の毒一
 毒おおの毒の毒ヨト 言ひて毒三郎の毒人毒て毒の同へ通うけれ
 ハお金の毒を出し 烟草を毒成持出で 金一ツ 松六宅お毒相を

中身一こつあ〜〜〜まこと 空をゆき お茶をきん〜ちま 三日も遠ひるは極よきん
あす 上り〜〜〜そのまのま 其也挨拶せり〜ま 今日は限つ〜けし
あ 受ても多ひな交るる急〜ひま 人遠成る〜ま 嘉相をするのど
 あり〜あ 茶と刃遠る程は縁が似て居る〜あれ 身も安心あんじん
これ 是よりお金小言ぢて酒食の用意をききせ彼是と馳まを
 あり〜ま トキニ今おちよととま〜ま 茶の身の上両方お
 あり〜ま どのとり人商も多いけどは身がふは遠ひも〜ま 身も
 圓覚へて居る実相の心茶の心大概は心もあ〜ま 縁上途ハ

不安定する〜ま 早〜ま 各射面極と思ひて招ひの〜ま
 身が尚身小使初〜ま 止者小は〜ま 今小誰〜ま 使を〜ま
 傳寄る〜ま 手由ら〜ま 左極〜ま 姉上逢〜ま 方
 心も極〜ま 他地の方ハ直小金を出〜ま 掛合〜ま
 極よするヨ小ハ〜ま 實ハ彼地小お動て居る〜ま 日小時小分小秒小も自
 私小の勝小もは動て居る〜ま 何日小何時小分小秒小も自
 由小多小の生小のヨ小分小左極小を〜ま 控小の〜ま 早〜ま け方
 へ〜ま 當小分小他小の〜ま 極よ小姉小と同居小居る〜ま

らぬ申さるゝと申せ初つゝるまでいひまゝお茶をたゞそ飲希
 鳥雅もすめて逢せし一隊も他人の事なる所あり申すは
 小波の鳥雅が幼少の情人客あ然りて二人が三幅射の
 美人より又二人のま中へ他人のむねに落雲と姉妹同様の
 親しき事ありし一極子であるの事本家といひたりの祖母と
 殺るゝ人の心よけの親類一同兼和の本妻山波の土音を列
 隊のる落雲と八雲の姉妹は且をりつゝと定むを付て上
 下まこけら古きものるまゝと思業のあつゝらけし事もまづ

お茶のゆきを逢せ親身の縁のりせとせし上御りくもある
 べしと鳥雅の許さるゝ事ありし小鳥雅と相対すれを鳥
 雅ハ早よとて早方の材方も早くそ夜にゆとりふりけりも
 お茶を新茶よりけりせを茶ありて福の別後逢せしか
 鬼でも自方より茶の治ま後付の身はけし早急を察の
 符へたけりて小波と落雲の落るを類しけしそを飲も所
 君の思ふ事よお茶をね梅甲をも相対して遂に鳥雅へ入る
 代とかまの安堵ありしは梅甲も徳の交舞ハ福戸へ私と

新考を伴入の類を考へて事ある内証をみるにけりたりは証を付て
見らる極むがう一に節をもども互に男を男入心のゆへして
生海をうしき人このまじかお然のさうぐし隨の小漢とお条ハ
福方入國馬一に隨の別荘の賣家とありしを幸ひし買
此のちせうぐしをわが
親入の鳥籠ハ祖母とを花を連て隠居しを三所入國之の
養ふを忍て世せかりたりも身よの職半分を儲金ふりしを
鳥籠の家入入て支那人の住せし身ハ後見となりて隠居同
形の樂ありし小漢お条お花の三人の中ハ中も隔かる

暇すくくして物々お存びくうし鳥籠の心も事々妻
妻との不仕付も出来ぬ花は和合し復々く三女同
月隠より移身して十月の後三女ともめてかく安産
あけは六小漢の産し子をめりてお成りしお条の妻
子ハ隠居所の跡よりと定めお花の産するまは本家の
養ふところなり何れも病鳥也不成長し漸くあるまじ
のこ懐きししをかくし千賀代お花忠と忠と國馬して暇
あくさしども千賀代ハるを産するのうりしお花お花のまじる

春の巻

るを昔の母志の書不別宅して一けを成るせしとまされ梅

里を驚くゆしもびふらんさきさきく諸方の妹もあぢたれて歌

る代もせしと榮へハ最も嬉しき縁うらみのと因縁を昔

のこ草紙と新編補してこ小同如く多岐流の流るる

○作者曰此草紙ハ新編書りしをこすとの多くあり

故とその想を白地ハ昔がさけ且バ遠く不音流る

隣るとそのある短歌で思ふ程をあふらばよりなく

この後の著編ハ似ても様向風流を改め替へて

らる教刻古風の体裁才一と良又少流り美の判

例を六ふりくせにそハ薄雲と二枝の思せる

よとを花の精よるぞとく小説の上向とまあり

た多入拾遺の巻と綴る目あふ婦女子のおお細

評るにへといふ

春色籬の梅卷之九了

